

幸せな 図書館の 設計図

浅野隆夫 著



目次

はじめに 014

この本を手にとってくださったあなたへ 016

本書の読み方について 017

序章

これまでの50年、これからの50年 019

——図書館がもう一度、動き出すために 019

ひとの想いから始めよう 021

第1章

図書館は、あなたの人生にまだ必要ですか？ 023

「最後に図書館へ行ったのは、いつですか？」 024

「図書館って（ ）な宝の山だね」 025

「図書館＝図書館」で本当にいいの？」 027
 「図書館の未来を見せた？ ある数字」 029
 なぜ「ダウンロードできない価値」が必要なのか？ 030

第2章 図書館は、空間で生まれ変わる 033

小さな図書館の大きな挑戦 034
 「なぜ1階には壁がないのか」 034
 「公共空間は、あいたに生まれる？」 036
 「なぜ2階にも、あいたをつくったのか」 037
 なぜメインフロアは、斜めから始まるのか 038
 「真ん中にあるのは、本棚じゃなくて、リサーチです。」 040
 見えることが、人を誘う。 041
 図書館の使い方には、ひとつの正解なんてない 043

第3章 貸さない図書館はなぜ生まれたか 047

ピンチは、ときに未来の味方になる 048
 立地が決める。誰を最初に幸せにするか 049
 図書館を、誰の「今」に尖らせるのか？ 051
 「貸さない」は、今すぐに応えるため——逆算で見えた答え 052
 本は読むだけじゃない。使うものだ。 053
 そして、「はたらくをらくにする」へ。言葉を掲げる勇氣 054

第4章 小さな図書館を強くした、選択と集中の物語 059

小説も絵本も置かない。だから生まれた3つの軸—WORK・LIFE・ART 060
 なぜ、最初の二冊はWORKだったのか？ 061
 いい仕事の裏には、かならず、いいLIFEがあるんです 063
 働くひとの視界を広げる——それがARTの役割です 065
 HOKKAIDO SAPPOROの棚——札幌の背景を知ると、働き方が変わる 068

ここではない、どこかへ——視点を動かす旅の棚 069
 食の街、札幌の仕事を支える。だからプロ仕様の本を揃えた
 実用の奥にある「思考の土戸」——だからリベラルアーツも 071
 072

第5章

人に寄り添う本棚づくりとは——

迷ったら、自分の友達を思い浮かべて—— 075

図書館を並べ替える勇氣——テーマ棚に踏み出した理由 076
 「いま、困っている誰か」に届く棚——テーマ配架という考え方 077
 探し回らせない棚——「会話が弾むコツ」が示したテーマ配架の力 079
 悩みが言葉になる前に——本棚が生むセルフレファレンス 080
 寄り添いを言葉で組み立てる——大・中・小テーマの三層構造 082
 テーマは「思いつき」ではつくらない——WORK棚の設計思想 083
 生活の「いま」を映す棚——LIFEテーマ誕生の舞台裏 085
 迷わず返せる棚——館内の住所——という棚番号の仕組み 086
 分類を尊重し、配架で飛ぶ——棚づくりの自由が生まれるとき 088

第6章

司書が自分を出す仕組み 095

司書が「自分」を込めたとき——棚が語りはじめる 089
 本棚は司書の花だん——どんな「花」を咲かせるか 090
 「私のためにつくってくれた棚？」と思われたら最高 091
 専門家の風がそつと入るとき——図書館とボランティアの健やかな距離 092

表現する司書が生まれる場所——棚が意識を動かす 096
 ハニワ——司書の声がそつと灯る「小さな棚」 096
 ART特別展示——越境が司書を育てる 100
 知のかげら——司書が自分を出せる、小さな舞台 102
 知のひらめき——本で遊ぶ、小さな大喜利 104
 図書館の外へそつとにじみ出る棚——MORIHICO.への越境 105
 現役司書のコラム——その棚の前に誰が立つのか 108

第7章 開館前に起こっていたこと―常識のカバーをはずそう―

113

「貸出をしないなんて…」 114

「コーピーを」ほされたらどうするんですか？」 115

NDCで並べないなんて、それでいいんですか？ 117

小説や絵本のコーナーがない図書館って、アリなんですか？ 118

資格試験の本をあえて「入れる」 119

電源・Wi-Fiをとことん開放する 120

おーい、こつしたほうがいいよ 121

「図書館のシンボルサインを決めよう」 122

名刺を持つとう——つながりのチャンスは日常に転がっている 123

エプロンはやめて、ジャケットを着よう 124

フロントを決めよう——情報のトーンをそろえるだけで館内が整う 125

力技の手作業に時間をかけない 126

第8章 私たちが考える課題解決型図書館とは

―本棚は、誰かの人生のそばにある― 129

「病気のことはわかった。で、私はどうしたらいいの？」 130

従来型図書館サービスと課題解決型図書館サービスの比較 131

コミュニケーションを通奏低音に 132

人間関係の棚——LIFEの中心にあるハート—— 134

LGBTQの本棚、そつと背中を押せるように 135

だれがこの棚の前に立つのか——顔を思い浮かべて、本を選ぶ 137

課題解決型図書館への（私の）違和感 139

専門家による出張窓口——図書館だからこそ生まれるつながる勇氣 141

開館後は、専門家が図書館に来てくれる仕組みを整えた 142

図書館がつなぎ役になると、相談は二気にスムーズになる 143

図書館の「敷居の低さ」が、専門機関と利用者をつなぐ 144

第9章 最新の情報はどこに？—ひとのあたまのなかに

「本当の最新情報はどこにありますか？」 148

図書館を「ライブハウス」にするという発想 149

読むだけじゃない。「観る読書」「参加する読書」 149

オープニングイベントは、私たちらしいものに！ 150

1階サロンの使い方 154

図書・情報館を彩るセミナー 156

まちの骨格をつくるひとたちの言葉 163

司書が考えて、さまざまなオリジナルセミナーを生み出す 164

第10章 そして声が返ってきた

本離れさえ、起きてはいなかった 168

本が渋滞している？ 170

4万冊の図書館に年間100万人？ 171

「税金を払ってよかった」？ 172

書店の店長さんから 174

司書の工夫が、人を図書館に呼び戻す 175

結局、ひとを呼び込んでいるものは何か 177

第11章 いい図書館ってなんだろう

図書を並べるだけでは、もう役割を果たしきれない。 182

人は目的があるから本を読む 182

「これ、図書館のおかげかも」 183

人と知、ひととひとが交差する場所へ 184

問いが芽吹く場所 185

まちのなかに溶け込む 187

第12章 これからの図書館に求めるもの 191

これからの図書館に求めたい3つのこと 192

読む場所から創る場所へ 195

発表する場所へ 197

図書館の価値を上げられるのは誰? 198

「人生、ネットだけで間に合ってますか?」 199

あとがき『幸せな図書館の設計図』に寄せて ― 201

特別対談 幅允孝（ブックディレクター）／浅野隆夫 205

幅さんと札幌市図書・情報館の出会い 206

熱い司書たちとの共同作業 209

「はたらくをらくにする」「テーマ配架」「WORK、ART、LIFE」の落とし込み 212

図書・情報館での仕事がその後につながった 216

本棚はメディア、独自の配架 217

いまは新しい図書館が生まれてくるタイミング 219

「本」は著者以外の誰かが読んで始めて「本」になる 221

AIに分類をまかせる? 222

選書は人の仕事 224

司書の雇用体系、育成について 227

地域ならではの図書館サービスの形 228

はじめに

こんにちは。浅野隆夫（あさの・たかお）です。

今は図書館の設計や運営に関わる仕事をしていますが、私の図書館人生は、じつは15年前の「まさかの異動」から始まりました。

「えっ、図書館？カウンターってどう立つの？」そんな戸惑いとともに、図書館の扉を開いたのが最初でした。

やがて、日々の利用者とのやりとりの中で、図書館という場所の奥深さに、少しずつ惹かれていきました。

けれど同時に、こうも思いました。「今の貸出メインの図書館って、本当にみんなの場所って言えるだろうか？」その問いを手放すことなく、多くの司書と働き、情熱や専門性に触れながら、私は本気で「図書館の可能性」について考えるようになりました。

そして、札幌市図書・情報館の立ち上げに関わる機会を得て、司書が日々つぶやく「こんな図書館があったらいいな」という思いを集めて、実際の空間として形にする挑戦が始まりました。

ここに記したものは、司書が発案し、開発し、実施していったものがほとんどです。私自身は、司書のつぶやきを翻訳し、市役所や外部団体とお話していただけ、と言っても過言ではありません。16人の司書、7人の事務職員、そして数えきれないほどの協力してくださった、みんながつくった図書・情報館です。

私は初代館長としての記憶をもとに、札幌市図書・情報館がどのように生まれ、どのように今の姿へと育っていったのかを、まるで建物の「骨格（スケルトン）」を見せるように、率直に記しました。

この本には、「図書館はもっと自由に、もっと面白くできる」という私の思いが、一冊を通して流れています。

この本を手にとってくださったあなたへ

図書館員の方へ

新館計画やリニューアルを検討している皆さん。「何かヒントがほしい」と思ったとき、本書がそのスパイスになれば嬉しいです。公共図書館の皆さんだけでなく、専門図書館や大学図書館に働く方のことも思っています。

これから図書館で働きたい方へ

司書課程の学生や、セカンドキャリアを考えている方。「今どきの図書館ってどんな場所？何ができる？」という問いに、等身大の答えをお届けします。

異動で図書館に配属された方へ

「え、私が図書館勤務!？」と驚いた方へ。かつての私ですね。本書は、最新の図書館像をわかりやすく伝える一冊です。

設計者、プランナー、コンサルタントの方、図書館を空間として考える皆さんへ

私は、神戸市、新潟県長岡市、長崎県長与町などの新しい図書館の空間作りにも携わってきました。図書館員なのか、建築のひとなのかわからなくなる時もあるくらいでした。図書館員の空間を大事に考える思い、を知っていただけたら、うれしいです。

図書館学を研究している方へ

本書は現場の知恵と挑戦の記録です。授業づくりや論文執筆の参考資料として、実践知を共有できれば幸いです。

そして、

「最近の図書館って面白そう」と感じたすべての方へ

本書では、図書館の今とこれからの姿、その核心にある「人」と「知」が交差する仕組みをご紹介します。

本書の読み方について

本書は、私が何年にも渡って、全国で行ってきた講演のエッセンスを再構成したものです。最初から読んでいただいても、気になる章だけを拾い読みしても構いません。必要なときに何

度でも読み返せる、そんな「道具のような本」を目指しました。

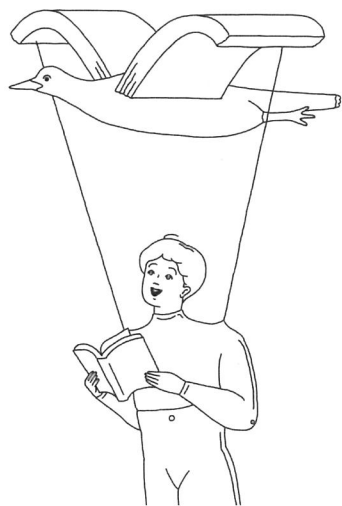
図書館をもっと良くしたいと願う方や、図書館の面白さを誰かと共有したいと思っている方に、本書があなたの背中をそっと押す存在になれば、著者としてこれ以上の喜びはありません。

さあ、ページをめくってみてください。

『幸せな図書館の設計図』の中には、これからの図書館をつくるための、12の扉が用意されています。未来の誰かのために、あなたがそっと開けてくれることを願って――。

序章 これまでの50年、これからの50年

——図書館がもう一度、動き出すために



いまから約50年前、図書館にひとつの革命が起りました。それは「館外貸出」の開始です。

かつての図書館といえば、入館票を書いて席に座り、出してもらった本を読み、必要なら、本の文字をひたすら書き写すような場所でした。けれど、貸出が始まったことで、図書館は、閉鎖的な場所から、誰にでも開かれた空間へと大きく変わったのです。

貸出サービスはもちろん大好評。図書館の数は他の文化施設に比べて圧倒的に増えました。

しかし、その後「図書館といえば、無料で本を借りられる場所」というイメージも付き、その後、図書館はしばしば「無料貸本屋」と揶揄されるようにもなりました。

もしかすると図書館の側もいつしか、「たくさん貸す」ことが評価軸になり、人と知が出会う場としての側面は、少しずつ影を潜めていったのかもしれない。

もし、50年前に「貸出」という革命があったとすれば、これからの50年には、「図書館は何のためにあるのか」という問い直しが、あらたに求められているのではないだろうか。その問い直しのヒントは、すでに各地の図書館で芽吹き始めています。

私たちはその先例に学ぶべく、全国津々浦々、数十ヶ所を見に行き、勉強させてもらいました。ただ、それらは、既存館での部分的な取り組みにとどまっていることも多く、全館規模での実

装や実践は、まだまだ少ないのが現実でした。

だからこそ私は、「一館まるごと、使う人の目線で変えてみよう」と考えました。

ひとの想いから始めよう

そんな思いで誕生したのが、札幌市図書・情報館です。4万冊のミニ図書館でありながら、毎年、100万人に近いレベルの利用があり、全国から多くの視察が訪れ、図書館の未来像を提示する先進事例として、Library of the Year 2019の大賞とオーディエンス賞をダブル受賞することができました。

この図書館の仕組みや考えは、いま各地の新しい図書館計画にも波を広げつつあります。

これまでの図書館は、「本を安定的に提供すること」に重きを置いてきました。けれどこれらの図書館は、その土台に立ちつつも、「本を起点で考えるのではなく、ひとの想いから始めよう」であるべきだと私は思うのです。

面陳列された本のパワーを浴びて自分自身を見つめ、また、誰かの話を聞き、語り合い、悩みや問いを共有しながら、少しずつ未来が開けていく。

図書館は、そんなひとりひとりのエンパワーメントを支える空間であり、知恵の共有とつな

がりが生まれる場所であるべきだと感じています。

それが、これからの50年を生きる図書館の、新しい姿だと私は信じています。

第1章 図書館は、あなたの人生にまだ必要ですか？

気がつけば図書館は

“思い出の中にはあるけれど、今は行かない場所”
になってはいないでしょうか

本来はもっと開かれた場所のはずなのに

「静かで、ちょっと入りづらい場所」というイメージに閉じ込められている
けれど、本当にそれでいいんだろうか

図書館は本の倉庫ではありません

人が動き、感じ、出会い

そして一歩前に進む場所です

その当たり前を、もう一度取り戻したい

そんな思いから、私の図書館での仕事は始まりました



「最後に図書館へ行ったのは、いつですか？」

私自身、もともと図書館員ではありませんでした。

市役所で長くICTを手掛けてきた職員だったのですが、ある日突然、異動辞令が出ました。

行き先は——「図書館」。

「えっ、図書館？カウンターって、どう立てばいいの？」正直、びっくりしたし、かなり戸惑いました。

それからというもの、片っ端から知り合いに聞きまくりました。

「最後に図書館へ行ったのは、いつですか？」

返ってきた答えは、だいたいこんな感じです。

「こどもが小さい時には絵本を借りに行ったなあ……」

「学生のとき受験勉強で使ったけど、それっきりだよ」

「小説がタダで借りられる場所でしょ？でも古い本しかなくて、あまり魅力ないんだよね」

なんだか、どの声も共通している気がしました。

一部の人だけが使う、忘れかけられた場所。

そんな図書館像が、ぼんやりと浮かび上がってきたのです。

これって、本当に「みんなの図書館」と言えるのだろうか？

あらためて考えてみました。多くの人にとっての図書館とは？

「無料で小説や新書が借りられる、静かな空間」。おそらく、このくらいのイメージではないでしょうか。

つまり、「本を貸す」ことが中心の、昔ながらの図書館像です。

けれど、図書館ってそれだけなんだろうか。もっと別の役割があるんじゃないか。そんな問いが、ここから静かに始まりました。

「図書館って（ ）な宝の山だね」

図書館に異動になったことを新聞記者の友人に伝えたとき、彼はこう言いました。

「よかったね！図書館って、宝の山だね！」

……と喜ばせてくれた直後に、

「ものすごく、使いづらい。宝の山だよね！」

第5章

人に寄り添う本棚づくりとは――
迷ったら、自分の友達を思い浮かべて――

図書館の棚は、ただ本が並んでいるだけに見えるかもしれませんが

けれど本当は、その一冊一冊の並びの奥に

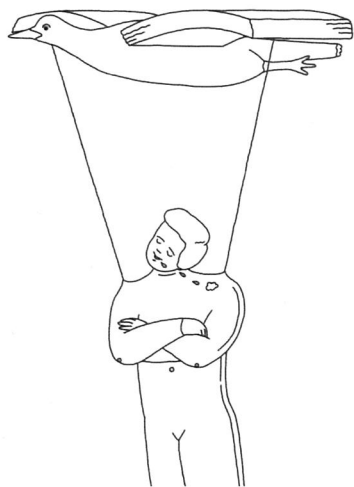
「いま困っている誰か」の姿が重なっています

「これ、いまの私に必要な言葉だ」と、胸の奥で小さく灯りがつく――

そんな出会いは、分類だけでは生まれません

迷ったら、自分の大切な友達の顔を思い浮かべてみる

そこから、棚は人に寄り添いはじめます



図書館を並べ替える勇気——テーマ棚に踏み出した理由

「どうしてオリジナルのテーマ棚にしたんですか？」よくいただく質問です。でも理由は意外とシンプルです。

中央図書館にいたとき、利用者と一緒に本を探して館内をあちこち歩き回る、という経験を何度もしてきました。

たとえば貯蓄の相談ひとつとっても——

・投資は3類

・貯金は5類

こんなふうに、同じ「悩み」を扱っていても、分類上はバラバラの場所に置かれてしまっています。わが国では、日本十進分類法（NDC: Nippon Decimal Classification）の順に本が並べられることがほとんどですが、この分類は学術寄りの設計で、ひとの悩みや課題のリアルさとは、どうしてもズレが出てしまふんですね。悩んでいる人は、分類番号をまたいで歩き回りたいわけではなく、「自分の課題に、すぐに行き着きたい」だけなんです。

忙しい人にもパッと届く棚がほしかった。その結果たどり着いたのが、テーマで本をまとめる「テーマ棚」でした。

誤解してほしくないのは、私たちが独自分類を新しくつくったわけではない、ということ。NDCは分類には使っています。背ラベルもNDCです。

ただ、「配架するときだけは、NDCを使わない」——その方法を選んだのです。

そもそもNDCは、本当に配架法として設計されたものなのか？カード目録しかなかった時代には、たしかにNDC順に並んでいる必要があったと思います。

でも今は、蔵書検索機（OPAC）があります。0類から9類まできれいに並んでいなくても、利用者は本にたどり着ける。だったら、もっと利用者の「今」に沿った並び方があってもいい。そう考えて、テーマ配架に踏み出しました。

「いま、困っている誰か」に届く棚——テーマ配架という考え方

テーマ配架で棚をつくっていくと、だんだん見えてくることがあります。それは、テーマでくくることで、その瞬間の「誰かの今」にちゃんと応えられる棚になるということなんです。たとえば、WORKの「ビジネススキル」の棚に来たと思ってみてください。

特別対談

幅允孝（ブックディレクター）／ 浅野隆夫

幅さんと札幌市図書・情報館の出会い

浅野 対談について、出版社からリクエストがありまして、私と幅さんの出会いから振り返って欲しいと。

幅 最初は浅野さんが私の会社（BACH）に電話をくださったのですよね。

浅野 そうなんです。私、幅さんのことは当然知ってたんですけど、なんかちょっと、いやすごい人だから。躊躇したのです。

幅 ははは。

浅野 電話をかける前、もう10年近く前に文科省の研修で幅さんが話していたのを知っていたんですよ。

幅 話しましたね。そうですか。

浅野 で、それから月日が流れ、うち（札幌市図書・情報館）の配架計画ではまらないピースがあつ

て。どうしようかと思っていた時に、うちの司書が「幅さんと呼んで！」と。うん。え？でも怖いよって。

幅 怖くないですよ。

浅野 いやいやいや。恐れ多いっていう意味で。

幅 いや、怖くないですよ。

浅野 それでお電話をしまして。

幅 そうですね。札幌市図書・情報館の独自分類の棚作りが混沌としているということ、まああちよつと何がどう転ぶかわからないですが、とりあえず（札幌に）行ってみましょうか？というような感じでしたね。

浅野 そうですね。

幅 でも私たちは当時、そんな濃密に図書館に関わってなかったんですよ。

浅野 あ、そうですか！

幅 どちらかというと。2025年10月5日でBACHも設立して20年になりましたが、もと私は図書館ではなくて書店（青山ブックセンター六本木店）出身です。1995〜96年を頂点にどんどん本の売上が下がっていったって、来店客数が減り、対面で人が書店に来ないという時でした。であれば、人がいる場所に本を持っていくという考え方で、私たちは異業種の中に書店を作るお手伝いをしたり、企業の図書室や、ホテルの図書室、あと病院や特別養護老人ホームなど、いままで本がなかったような場所に本を選んでライブラリー空間を作る仕事をやっていました。膨大な本をざっと並べて見せるというよりは、そこならではのキュレーション。つまり、なぜその本がそこにあるのかという意図を、分類法やコンセプトを含めて明確にした「本の場所づくり」をしていたのです。よく私たちはサイト・スペシフィック（そこならではの）と言いますけれど、そういうある環境、空間ならではの読書体験を設計しようとしていました。もちろんNDC（日本十進分類法）という存在自体は意識しながら、ぎゅっと選び抜き再編集した分類を用いて、まずは1冊を届ける凝縮した棚を作る経験値をいろいろところで積みました。

ですので、浅野さんのお話を聞き、何かできることがあるかもしれないと思って、まずは来てみたっていうのが実際です。

浅野 そうでしたか。

幅 来てみたら、本当に熱い暴れん坊の司書さんたちがいっぱいでした。

図書・情報館ならではで、分類の壁を越えようとしていらつしたのですよね。逆に、客観的に見ると、NDCを逸脱しすぎじゃないか、というよりはそこからちよつと跳躍が、いきなりホップ・ステップがなく急にジャンプをしようとしたので、もう少し、NDCに立ちかえりながらやった方がいいんじゃないですか。パッと聞くと立場が真逆のようなことを申しました。

浅野 「私が言うのも変ですが」って。

幅 そうそう。

熱い司書たちとの共同作業

浅野 幅さんに札幌にお越しいただいたのはオープン前でしたね。

幅 オープンの6〜7ヶ月前とかでしたっけ？もうちよつと直前でしたっけ？

著者略歴

浅野 隆夫（あさの・たかお）

札幌市図書・情報館初代館長。テーマ配架や「貸出しのない図書館」など、従来の常識にとらわれない新しい図書館づくりを実践。これまで神戸市、広島市、長岡市などの図書館づくりに携わり、現在は北九州市、長与町、厚真町をはじめ、全国の自治体で図書館・文化施設づくりや読書活動を支援する。総務省地域情報化アドバイザー、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター客員研究員。北海道武蔵女子短期大学・札幌国際大学非常勤講師。

Email: asanolib@gmail.com

幸せな図書館の設計図

2026 年 9 月 25 日 第 1 刷発行

著 者／浅野隆夫

発 行 者／山下浩

発 行／日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

組版処理／日外アソシエーツ株式会社

印刷・製本／株式会社平河工業社

©Takao ASANO 2026

不許複製・禁無断転載

<落丁・乱丁本はお取り替えいたします>

《中性紙北越淡クリームキンマリ使用》

ISBN978-4-8169-3117-8

Printed in Japan, 2026